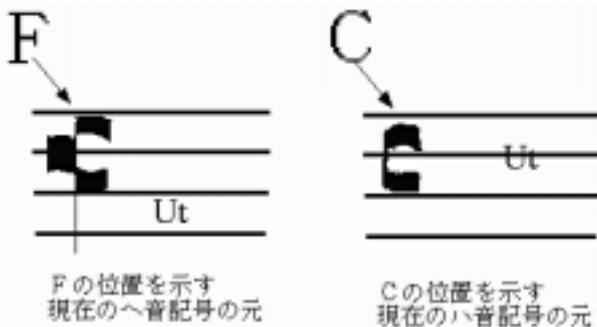


鈴木 寛 (兵庫教育大学教授)

ドはド？ (その 3)

ドレミの名称はグイダーの発案によるものであることはすでに述べました。Ut をドとして Ut Re Mi Fa Sol La のヘクサコード(6音音階)各音を音階の音に当てはめたことになっています。この「聖ヨハネの賛歌」は現代風な記譜法に直すと実は「二短調」で書かれているのです。人間の声域に合わせて工夫されたグレゴリオ聖歌の楽譜は五線譜ではなく4線譜でしたから第3線の頭に書かれた記号は「F」の飾り文字で即ち第3線をFとするヘ音記号なので



す。このドリアと呼ばれる教会旋法で書かれた聖ヨハネの賛歌はいわば二短調でしたのでその終止音は現代風に言えば【ラ】の音でこの曲の主音であり、出だしの音のUtは現代風に言えば【ソ】の音で実は【ド】という主音ではないのです。

このことは聖ヨハネの賛歌こそが移動ド唱法の元祖であったという説を覆してしまいます。声域を4線の中に収



めることができるのはヘクサコード(6音音階)かペンタトニック(5音音階)しかありません。そのため移調すると4線からはみ出ないように平行移動させるため「C」の飾り文字や「F」の飾り文字を譜頭の任意の線上に記したのです。これは音部記号というよりも寧ろ調号のような働きをしていたことがわかります。言い換えればドの位置を任意の場所に平行移動させるという移動ドの概念に近かったことがわかります。

このヘクサコードには終止音としてよく使われる【ラ】の音に【A】というアルファベットの最初の文字が音名として与えられ、以下順にB C D E F Gが音名として使われるようになりました。最初の音階はエオリア(純短調)と呼ばれるギリシャの旋法からきたものであることから「初めに短調ありき」だったのです。ですから長音階はCという途中の音名から始まるのです。勿論今日の長音階に当たるイオニアで書かれた曲も「自然ヘクサコード」として存在しましたし、現在のト長調にあたる「長ヘクサコード」の曲もありました。

要するに「音名」と「階名」の混同の歴史は10世紀にまでさかのぼることができるのです。Utやドと呼ばれる音が移動ド的に使用されるようになったのは、最初に機能と声系を体系化したラモー(1722)以降であり、「通奏低音」と呼ばれるなどの記号が和音の転回形も含めてドまたはドミソとしてトニック(トニカ)の地位を得たことによります。

この【C】を八長調では【C】というコードネームで置き換えられますので【=C】というとてもない誤解をしている人がジャズピアニストにも居ます。

もしも、【=C】ならば、ジャズのセッション等によく見られる移調に対してどう対応すれば良いのでしょうか。例えば二度高い調に移調する場合、さっきまで【レ】と呼んでいた音が主音になるわけです。つまり「レがドになる？」のです。ですから【=D】となり、以下順にずれてゆきます。やの和音はファやソの上に作られるわけですが、八調読みや不精読みではどの音が本当のファやソなのかがすぐにはわかりません。日本のジャズピアニストでもこの移調セッションができない気の毒なひとがかなり居るようです。

【ド】は音名ではなく【階名】であり、【ド】は【主音】であることをきちんと教えられる教師こそが今必要なのです。